

## 【資料2】

## 2019年度 授業評価(授業アンケート)結果報告

### 1. 授業評価実施の経緯

- 2003～2006 北辰図書によるアンケートを導入、4年間継続
- 2007～2008 全教員による手作りアンケート方式実施
- 2009～2013 再び北辰図書によるアンケートに戻して、以後5年間継続
- 2014～2019 代々木ゼミナール教育総合研究所に変更して6年目、次年度も継続の予定

### 2. 授業評価の特徴

- 質問項目の内容・意図が明確であり、生徒が解答しやすく、また教員の立場からも改善につなげやすい。
- 発送から3週間程度と、比較的短期間で解析結果が送付される。
- 解析後に講師が派遣されて、全体場で評価の読取り方や今後の改善方法、授業力向上策などが指摘され、事後の授業づくりの参考になる。実施以後も、授業改善・生徒指導の提言を紹介してくれる。

### 3. 授業評価の質問一覧

〈2019年度の質問項目＝教壇系〉

番号	項目	質問内容
1	板書や資料	板書やプリント ICTなどの教具は、授業の理解に役立っている。
2	指示と説明	先生の説明はよくわかり、指示にとまどうことはない。
3	理解確認	先生は、生徒の理解を確かめながら授業を進めてくれる。
4	対話の効果	授業中の話し合いや周りとの協働を通して、学びが深められる。
5	目標理解	先生は、達成すべき目標やポイントをはっきり示してくれる。
6	活用機会	授業で理解したことを使って自分で考える機会が整えられている。
7	学習効果	この授業を受けて、学力や技能の向上を実感できた。
8	進み方	授業の進み方、(授業で扱う分量) はあなたにとってどうですか。
9	難易度	教材や課題の難易度はあなたにとってどうですか。
10	学習方法	あなた自身、この科目の学び方や取り組み方が身についてきた。

〈2019年度の質問項目＝実技系〉

番号	項目	質問内容
1	ポイント説明	先生の説明を通じて、練習や作業のポイントがよくわかる。
2	行動指示	授業中の約束事や先生の指示は明確で、戸惑わずに行動できる。
3	生徒理解	先生は生徒の状況をよく把握しながら授業を進めてくれる。
4	表現の場	展示や発表・試合など、自分の取組の成果を表現できる機会がある。
5	目標理解	振り返りや先生からの助言を通じ、次に向けた課題が意識できる。
6	振り返り	授業を受けて、知識や技能が身につき、自分の進歩を実感できる
7	学習効果	この授業を受けて、学力や技能の向上を実感できる。

8	進み方	授業の進み方、(授業で扱う分量) はあなたにとってどうですか。
9	難易度	教材や課題の難易度はあなたにとってどうですか。
10	興味関心	授業を通してこの科目への興味関心が高まった。

〈昨年度の質問項目〉

番号	項目	質問内容
1	話し方	先生の話し方は聞き取りやすい。
2	説明と確認	説明はわかりやすく工夫され、理解を確認しながら授業が進められている。
3	関係	先生は熱意を持って授業を行い、生徒の状況をよく理解して丁寧に応じてくれる。
4	ガイダンス	授業の目的や取り組み方について、先生は事前に十分な説明をしてくれる。
5	活用(教壇系)	授業や家庭での課題を通じて、授業で学んだことを使ってみる機会がある。
	助言(実技系)	評価の観点が予め示され、それに基づく改善のための助言が適宜行われている。
6	学習効果	この授業を受けて、学力や技能の向上を実感できた。
7	興味関心	授業を受けることで、この科目に対する興味や関心が高まった。
8	進み方	授業の進み方、(授業で扱う分量) はあなたにとってどうですか。
9	難易度	教材や課題の難易度はあなたにとってどうですか。
10	意識姿勢	この科目は、得意ですか、苦手ですか。

- 今年度は従来の質問項目を再検討し、本校でも導入がはかられている ICT 教育の定着度や協働や双方向的な授業などの展開に関する項目を新たに設定した。また、「教壇系」と「実技系」の場合に同じ設問にってしまうと、生徒が質問の意図を正しく把握できない場合や授業の実態もあるため、よりアンケートの制度をあげるために、10 項目中 7 項目で質問内容・文言を変更した。
- 今回新たな観点として設定したのは、質問 1 と質問 4 である。質問 1 は ICT などの活用に関して、質問 4 は対話や協働に関する内容の確認のために設定した。
- 他の質問項目に関して、質問 2 は昨年度の 2 の一部、質問 3 は 2・3 の一部、質問 5 は 4、質問 6 は 5、質問 7 は 6 を改定した項目である。
- 質問 8・9 は昨年度とほぼ同様である。質問 10 は昨年度までの得意・苦手という側面ではなく、授業を通じての自己の向上が確認できる質問へと改めた。
- 質問 1～7 の項目に関しては、A「非常によくあてはまる」、B「よく当てはまる」、C「どちらかといえば当てはまる」、D「あまり当てはまらない」、E「当てはまらない」の 5 段階で評価する。
- 上記の 7 項目は A=10、B=8…、E=2 という得点がつけられ、最終的に 100 点満点に換算した得点率で示される。高いほうが、高評価となる。
- 質問 8 は、A「速すぎる」、B「やや速い」、C「ちょうどよい」、D「やや遅い」、E「遅すぎる」の 5 段階で評価する。

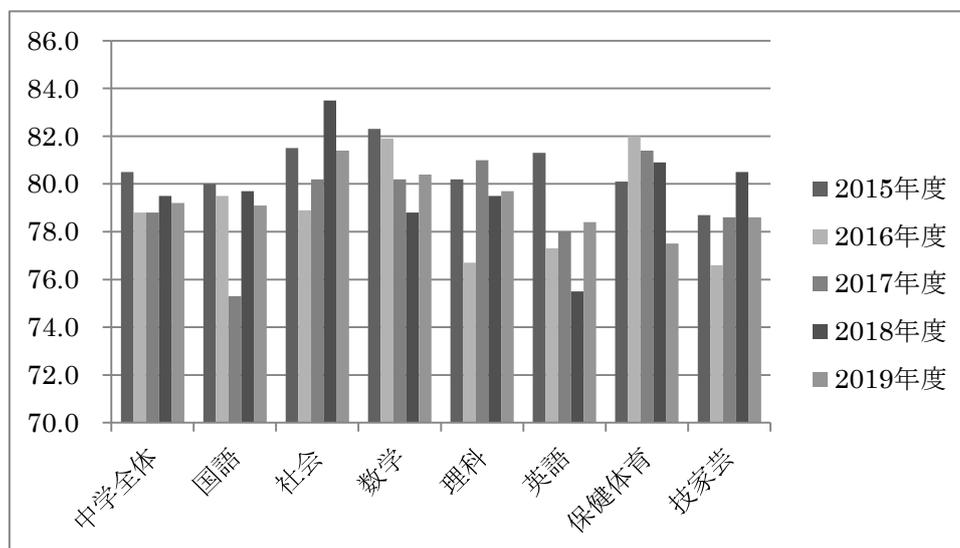
- 質問 9 は、A「難しすぎる」、B「やや難しい」、C「ちょうどよい」、D「やや易しい」、E「易しすぎる」の5段階で評価する。
- 質問 10 は、A「強く思う」、B「そう思う」、C「少し思う」、D「あまり思わない」、E「まったく思わない」の4段階で評価、得意方向か苦手方向かを明確に示す。
- 質問 8～10 は、A=+10、B=+5、C=0、D=-5、E=-10の平均数値で示される。質問 8・9 は0が理想的ではなく、若干「速い」・「難しい」によった+1～2程度が理想的とされる。
- 生徒は上記アンケート項目以外にも、教員に対する記名式でコメントを記入することができる。コメントは生徒から回収後に、担任教員がアンケートとは切り離して、直接担当教員に手渡している。
- アンケートは、例年同様に6月下旬から7月上旬のWDやLHR時に実施した。

#### 4、アンケート実施後の対応

- 今年度は、8月26日（月）に授業評価検討会を実施した。
- 講師より全体概評、評価点、課題、改善方法などが紹介され、その後質疑応答を実施して内容を深めた。
- この後、午前中は教科、午後は担当学年で会合を開く。午前中は各自の結果を報告しあい、そのなかで教科共通の課題や長所などを確認し、今後の授業の改善内容・方法などを討議し、必要によっては以後の教科会でも継続審議を行った。
- 午後は、学年や各クラスの評価点・課題を基に、今後の授業改善などを検討した。
- これらの討議を参考にして、自分の課題克服を中心に10月上旬までに改善シートを副校長に提出した。
- 授業見学やその後の教科会での話し合いなども含めて、各自・各教科で改善を重ねた。
- 2月下旬から3月上旬に、最低でも自分が課題を抱えている1クラス以上で授業アンケートを行い、改善状況を次回教科会で報告し、成果・課題などを再度確認する。

#### 5、教科別の総合評価

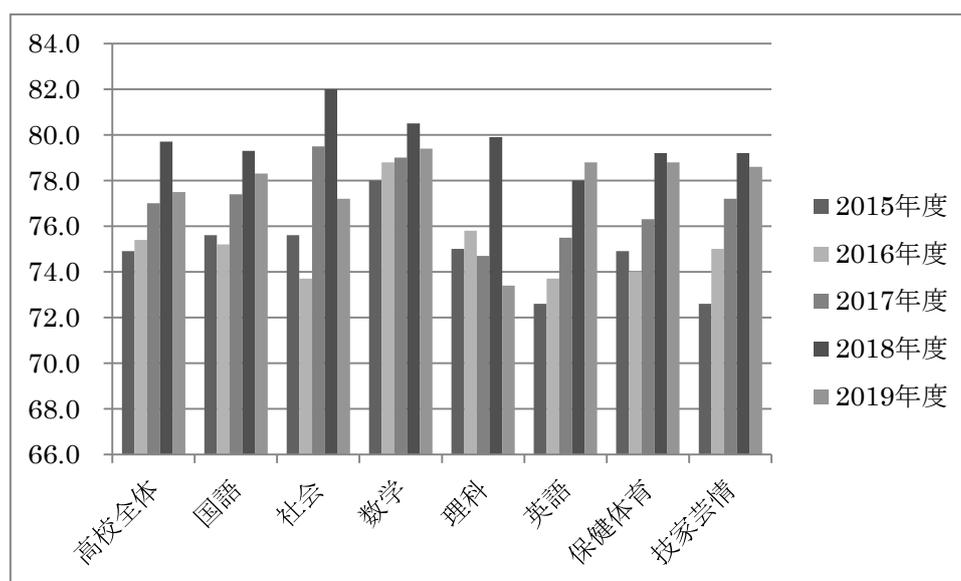
〈中学校〉



	中学全体	国語	社会	数学	理科	英語	保健体育	技家芸
2015年度	80.5	80.0	81.5	82.3	80.2	81.3	80.1	78.7
2016年度	78.8	79.5	78.9	81.9	76.7	77.3	82.0	76.6
2017年度	78.8	75.3	80.2	80.2	81.0	78.0	81.4	78.6
2018年度	79.5	79.7	83.5	78.8	79.5	75.5	80.9	80.5
2019年度	79.2	79.1	81.4	80.4	79.7	78.4	77.5	78.6

- 今年度から質問項目が変更されたため、一概に昨年度との比較はできないが、中学校においては、教科によって若干の差異はあるものの、全体としては大きな変化がみられていない。
- この要因としては、中学校においては高校よりいち早くワイドが導入され、もっとも早く学年全体で導入された中学1年では今年で4年目をむかえる。またそれ以前においても、プロジェクターを活用した授業に取り組ませる教科も少なくなかった。このため、ICT導入に関して、各教科でこれ以前からスムーズに展開し、生徒も入学時からワイドを活用した授業に慣れていたことによるものと思われる。この点に関しては、項目ごとの考察においても後述する。
- 社会科が若干評価を落としているものの、それでも80%台であり、その他の教壇系の教科は評価をあげているのは、ICT教育などを中心に、生徒の理解を深める教育内容を展開したことによる。
- 一方で、実技系の科目においては評価を落としている。質問の文意が適切であったかも含めて、第2回目のアンケートの結果を踏まえて今後検証したい。

〈高等学校〉



	高校全体	国語	社会	数学	理科	英語	保健体育	技家芸情
2015年度	74.9	75.6	75.6	78.0	75.0	72.6	74.9	72.6
2016年度	75.4	75.2	73.7	78.8	75.8	73.7	74.0	75.0
2017年度	77.0	77.4	79.5	79.0	74.7	75.5	76.3	77.2
2018年度	79.7	79.3	82.0	80.5	79.9	78.0	79.2	79.2
2019年度	77.5	78.3	77.2	79.4	73.4	78.8	78.8	78.6

- 高校生は中学生に比べて授業への要求度も高いため、全体の平均値も低めになりがちで例年 75 ポイント前後であったが、2017・2018 年度は 2 年連続で上昇した。しかしながら、今年度は昨年度より 2 ポイント下降した。
- この理由に関しては、質問の変更が考えられる。高校校舎に位置する高校 1・2 年の教室では今年度からワイドが導入されたものの、高校 3 年の教室にはまだ導入されていない。高校 3 年の教室および理科実験室においては、次年度からの導入が決定している。高校においても、従来からプロジェクターが一部授業では実施されていたものの限られており、またネット環境も整備されておらず、昨年夏の工事によって改善されるにいたった。このため、まだ各教科において ICT を活用した授業の展開が不十分または未整備であり、そのため数値が落ちたと考えられる。なお、ICT 教育に関しては、学校全体および各教科で研究中で、校内研修なども適宜実施してスキルを高めている。
- 英語科はワイド導入前からプロジェクターを利用し、グループによる英会話の実践などを進めていたため、安定的な評価を得ている。他の教科も著しく下降した教科もあるが、この評価を基に夏休み以降、改善をはかっている。
- 実技系教科は、例年と同様の数値である。これは質問項目の趣旨を理解して回答したかったかと思われる。

## 6、質問項目ごとの評価

今年度は、昨年度までと質問項目が違うため、例年通り最初の 7 項目に関して、中学校・高等学校別に、学年別で示して考察をする。したがって、例年では年度間比較が中心であったが、今年度は学校別・学年別の特徴を中心に考察する。

〈中学校〉

教壇系	1	2	3	4	5	6	7
中学全体	84.8	81.1	79.5	77.2	79.0	78.2	77.2
中学 1 年	90.1	85.6	84.2	82.8	83.5	83.1	80.9
中学 2 年	82.8	78.9	76.8	76.1	76.3	75.0	74.7
中学 3 年	82.0	79.2	77.9	73.5	77.4	76.6	76.0

実技系	1	2	3	4	5	6	7
中学全体	79.5	79.9	77.8	76.9	79.9	75.0	75.7
中学1年	84.4	84.4	81.0	78.7	83.4	77.6	78.6
中学2年	76.9	77.1	75.5	76.7	78.3	72.9	73.6
中学3年	74.0	75.5	74.9	74.3	75.8	72.8	73.0

- 例年同様、中学1年はポイントが高く、学年が上がると評価が厳しくなる傾向にあるが、今年度は中学2年の評価が低い傾向がみられ、5つの質問で中学3年よりも低い結果となっている。
- 中学2・3年生の評価が低くなるのは、中学1年の夏休み前段階はまだ中学生としての学習に慣れさせるために、授業の展開も緩やかで、学習に必要なことを1つ1つ確認し手いる段階であるため、比較的授業に順応しやすい状況であるためであり、これ以降授業の内容も深まり、生徒に求められていくことが増えていくと、生徒自身にとって従来よりも学習内容を消化しにくい状況となるため、評価が低くなると思われる。
- 実技系も同様で、学年があがるにつれて、内容が複雑になり、生徒が注意しないと全体の理解に及ばないため、中学2年以降評価が低くなると思われる。
- 教壇系では、質問1・2・3・5の評価が比較的に高い。これからICTを含めて教材が適切であり、理解を確認しながら授業が展開されていることがうかがえる。これは前述したように、中学各学年は入学時からホワイトボードにワイドが導入されており、そのような授業内容の開発・変更などが順調にすすめられていたことが証明された結果となった。
- 一方で質問4・7が低めであるため、協働や対話的な授業が弱い面があり、生徒が学力向上を意識できていないと感じる生徒が存在することも読み取れる。質問4が学年が上がるごとにポイントが下がっていることも課題である。

〈高等学校〉

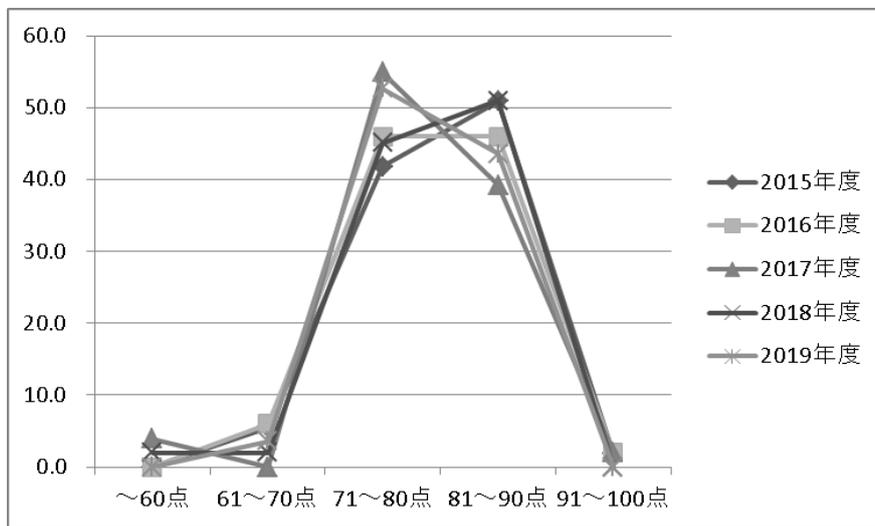
教壇系	1	2	3	4	5	6	7
高校全体	79.9	78.2	75.7	72.6	75.9	76.3	73.2
高校1年	80.8	78.3	76.3	73.3	75.3	75.2	73.9
高校2年	78.5	76.5	73.9	69.3	74.3	74.3	71.4
高校3年	80.3	80.3	77.3	75.6	78.6	80.2	74.5

実技系	1	2	3	4	5	6	7
高校全体	81.5	80.7	78.7	74.7	77.9	75.9	75.5
高校1年	80.9	80.2	79.5	76.7	78.7	77.1	76.2
高校2年	82.3	81.5	77.5	71.7	76.9	74.1	74.5
高校3年	82.3	81.5	77.5	71.7	76.9	74.1	74.5

- 教壇系では80ポイントを越える質問項目がなく、現在授業内容の改善をはかっているものの、かならずしも成果に結びついていないことが読み取れる、

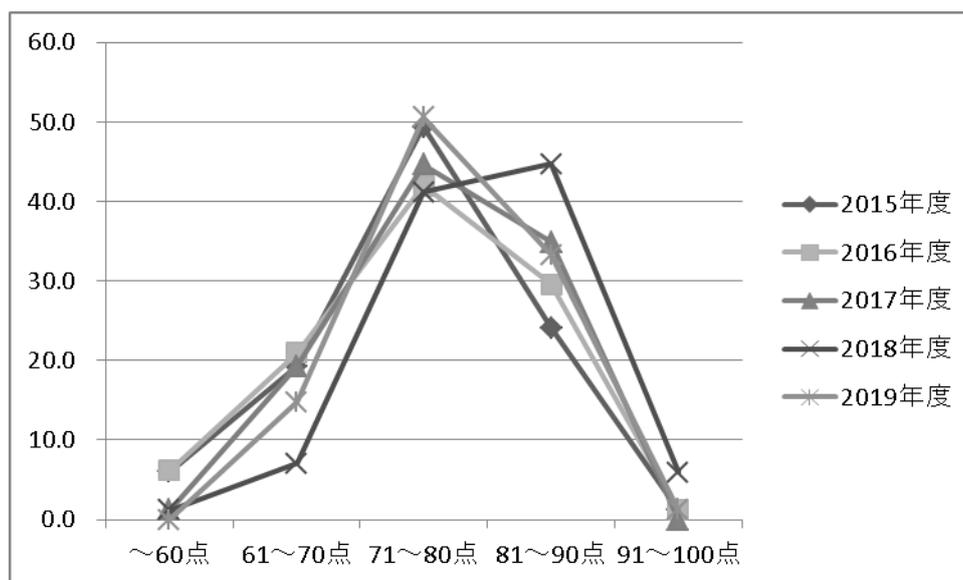
- とくに質問4が低いことから、対話や協働の場面があまりないと生徒は感じている。とくに高校2・3年でこの評価が低いのが、受験への意識が強いこれらの学年においては、講義が中心となり、また年代的に質問しても積極的な回答が少ないことも多く、このような結果に結びついている。各教科において、この結果を踏まえて授業改善が検討されるものの、この項目と入試を意識した授業とは相容れない可能性もある。
- 教壇系の質問7から、学力の向上を感じていない生徒も少なくなく、授業を通じての自己肯定感の向上も今後の課題となる。ただし、例年この項目においては、75ポイント前後であるため、例年と大きな差異が生じているわけではない。
- 実技系は、中学と比較してポイントが高いが、質問4・6・7が多く、自己の成長や次なる課題の設定が今後の課題である。

7、教員の評価分布  
〈中学校〉



	~60点	61~70点	71~80点	81~90点	91~100点
2015年度	0.0	5.5	41.8	50.9	1.8
2016年度	0.0	6.0	46.0	46.0	2.0
2017年度	3.9	0.0	54.9	39.2	2.0
2018年度	2.0	2.0	45.1	51.0	0.0
2019年度	0.0	3.6	52.7	43.6	0.0

〈高等学校〉



	~60点	61~70点	71~80点	81~90点	91~100点
2015年度	6.0	19.3	49.4	24.1	1.2
2016年度	6.2	21.0	42.0	29.6	1.2
2017年度	1.2	19.3	44.6	34.9	0.0
2018年度	1.2	7.1	41.2	44.7	5.9
2019年度	0.0	14.8	50.6	33.3	1.2

- 昨年度は 80 点台にピークがあったが、今年度は中学・高校ともにピークが 70 点台に移った。この最大の理由は質問項目の変更である。新たな授業の観点についても質問項目に加えたためであろう。
- 今回の質問項目の変更は、1 つには新たな教育の観点に関して教員によっては十分に対応できていないことが明らかになった。厳密にいうと、この種の授業導入がはかられているものの、生徒には効果的な学習と受け止められていない部分もあると判断される。このアンケートの結果を踏まえて、改善に励みたい。

以上